

論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表

学位規則第8条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

○氏名	李 銀眞 (い うんじん)
○学位の種類	博士 (文学)
○授与番号	甲 第1008号
○授与年月日	2014年9月25日
○学位授与の要件	本学学位規程第18条第1項 学位規則第4条第1項
○学位論文の題名	近畿地方における7世紀の造瓦体制と寺院造営の展開
○審査委員	(主査) 矢野 健一 (立命館大学文学部教授) 木立 雅朗 (立命館大学文学部教授) 高 正龍 (立命館大学文学部教授)

<論文の内容の要旨>

本論文は、造瓦技術の詳細な検討によって、近畿地方における7世紀代の造瓦体制の変遷の過程を明かにしようとしたものである。造瓦技術の検討にあたっては、平瓦・丸瓦という、もっとも普遍的で大量に出土する資料を新しい切り口から分析しようとしている。

全体は下記のようにI～VIの6つの章に分けて構成されている。

[構成]

はじめに

第I章 造瓦体制をめぐる既存の研究成果

第1節 奈良・平安時代の造瓦体制研究

第2節 飛鳥・白鳳時代の造瓦体制研究

第II章 問題認識と本論の研究手法

第1節 問題認識

第2節 本論の研究手法

第III章 7世紀前・中葉の造瓦体制

第1節 飛鳥寺における造瓦集団の成立

第2節 豊浦寺と隼上り窯からみた造瓦集団

第3節 四天王寺と楠葉平野山瓦窯からみた造瓦集団

第4節 7世紀前・中葉の造瓦体制の特徴

第IV章 7世紀後葉の造瓦体制—栗栖野瓦窯5・6号窯の例を中心に—

第1節 栗栖野瓦窯跡5・6号窯における造瓦工人

- 第2節 7世紀後葉の造瓦体制
- 第V章 7世紀後葉の造瓦体制と造瓦工人の「系列」－「高麗寺系列」の場合－
 - 第1節 「高麗寺系列」造瓦集団をめぐる研究現況と瓦の様相
 - 第2節 「高麗寺系列」造瓦集団の成立
 - 第3節 伽藍整備期における「高麗寺系列」造瓦集団
 - 第4節 「高麗寺系列」造瓦集団の展開様相
 - 第5節 高麗寺跡からみた7世紀後葉の造瓦体制
- 第VI章 7世紀末葉の造瓦体制
 - 第1節 藤原宮造瓦における各生産系列
 - 第2節 藤原宮造瓦における造瓦組織と造瓦体制
- おわりに

「はじめに」では、本論の前提となる近年の考古学的研究の現状を紹介している。これまで7世紀末の爆発的な古代寺院増加の背景について、文献史料を援用した様々な解釈がなされてきたが、上原真人や梶原義実らによって批判的な検証が進められ、徹底した考古学的な分析が求められている。本論では、そうした新しい研究動向を受け、寺院造営を支えた造瓦組織の研究に注目し、激増する瓦需要に対して如何に対応したのか、飛鳥寺造営から藤原宮造営に至るまでの造瓦体制の変遷を分析することで、考古学的な検討・解釈を進めることにしたと述べている。

「第I章 造瓦体制をめぐる既存の研究成果」では、従来の造瓦体制に関する研究史を概観し、検証を加えている。小林行雄は「造東大寺司造瓦所解」（正倉院文書）をはじめとするいくつかの文献史料を検討し、奈良時代の造瓦組織の具体的なイメージを提示した。また、瓦工への賃金の支払い方法について出来高払であったことを指摘したが、それを考古学的にはじめて証明したのは上原真人による恭仁宮式瓦の検討であった。上原は文字瓦を詳細に検討し、はじめて本格的な造瓦組織の考古学的研究を深めたが、それに対しては山崎信二から、極めて特殊な資料に基づく検討にすぎず、その解釈に疑問が投げかけられた。文献史料と考古資料の双方を比較検討する場合、未だに解釈の違いが払拭されず、国分寺造営に関わる解釈についても、梶原義実からも批判的な検証が行なわれている。平安時代の造瓦組織についても考古資料と文献資料の双方から検討されており、8・9世紀までの官窯体制が11世紀には崩壊し、造瓦組織や需給体制が一変すること、12世紀には瓦工が自立しはじめ、中世の瓦大工へと繋がってゆくと理解されている。

このように奈良時代以降の造瓦組織研究は、文献史料に恵まれ、考古資料との比較検討によって豊かなイメージが描かれている。しかし、文献史料がほとんど確認できない7世紀代については、考古資料を徹底的に検討せざるを得ない。瓦窯の立地条件や須恵器生産との関連、軒瓦の同范関係などが検討されてきたが、分析の中心は軒瓦であった。そのため、丸瓦・平瓦の製作技術も含めて総合的に検討する必要も指摘され、五十川伸矢らによ

る窯跡出土品の詳細な検討も進められつつある。

「第Ⅱ章 問題認識と本論の研究手法」では、第Ⅰ章で概説した従来の考古学研究が、文献史学の成果に頼ってきた点が近年批判されていること、丸瓦・平瓦の検討が7世紀後半に偏ってきたこと、丸瓦・平瓦の検討の必要性が指摘されいながら、総合的な検討が遅々として進んでいないことなどを批判的に検証している。その原因について丸瓦・平瓦は出土量が極めて多く整理検討に多くの時間を要すること、その割に軒瓦ほどの情報量をもっていないことなどから、避けられる傾向にあると分析している。しかし、そうした困難があったとしても、軒瓦と組み合わせることでより具体的な造瓦組織の検討が可能になる。そのため、本論ではあえて丸瓦・平瓦の製作技術を主軸におくと宣言している。

また、検討に先立ち、生産に関わる用語・概念の整理を行ない、道具とその使用方法についての分析視覚を整理し、参考となる文献史料・民俗事例を整理している。

「第Ⅲ章 7世紀前・中葉の造瓦体制」では、飛鳥寺・豊浦寺・四天王寺という飛鳥時代建立の寺院と瓦窯の分析を行なっている。飛鳥寺は文献史料から百濟から4人の瓦工が派遣されたことがわかっているが、考古学的には二つの系統の造瓦集団が復原されている。飛鳥寺建立後、この二つの造瓦集団を基盤にして、各地で造瓦活動が多様に派生展開し、造瓦集団の頻繁な移動や技術的交流があったことが明かにされているが、従来の想定以上に多くの造瓦集団が存在したと指摘している。従来の研究が軒瓦に偏っていたが、丸瓦・平瓦にも多様性が確認され、そのみを生産した造瓦集団も想定されるためである。山田寺では軒平瓦と平瓦は異なる桶で製作されたが、のちに同じ桶で製作するようになると花谷浩氏が注目すべき指摘を行なっており、その傍証となる可能性がある。また、官寺的な寺院では造瓦技術が再編成されることがあったが、その他の寺院ではそうではなかった可能性を指摘し、中央の指導を過大評価することを戒めている。

「第Ⅳ章 7世紀後半の造瓦体制—栗栖野瓦窯5・6号窯の例を中心に—」では、栗栖野5・6号窯の窯詰め一括資料を詳細に検討している。すでに岡田雅彦氏によって平瓦の詳細な検討が行われているが、丸瓦については詳細な検討がなされていない。そのため、丸瓦の模骨を復原するための新しい方法を創案し、詳細な検討を行なった結果、岡田氏の分析結果と合致し、造瓦工人は最低二人以上の小規模なものであることを確認している。7世紀後半段階では少人数で構成された小規模な造瓦単位であり、そのために頻繁に移動することが可能であり、それが各地の爆発的な寺院増加に対応できた原因であったと想定している。また、軒瓦の出土が確認されていないことから、丸瓦・平瓦の専用窯であった可能性、つまりは分業されていた可能性を指摘している。

「第Ⅴ章 7世紀後半の造瓦体制と造瓦工人の「系列」—「高麗寺系列」の場合—」では、高麗寺を中心に南山城地域の造瓦工人の系列について新たな視点から批判的検証を加え、Ⅳ章で紹介した新たな丸瓦の詳細な分析を高麗寺とその周辺遺跡でも行なっている。

高麗寺は南山城最古の寺院であり、その軒丸瓦を祖型としたものが、南山城の地方寺院

に伝播している。そのため、高麗寺は地域の中核的な寺院として注目され、その影響を受けた寺院群やその造瓦集団に「高麗寺系列」と呼ぶべきまとまりが想定されてきた。しかし、丸瓦を中心とした分析を行なった結果、それは軒瓦を中心とした限定的なものであり、丸瓦の分析や、垣内拓郎が分析した軒平瓦からは、「高麗寺系列」という実態は確認できない。あくまで軒丸瓦の範型に限定されるものにすぎないものであり、同じ道具を異なる工人が使用している事例を確認し、すでに造瓦集団が分業して複雑に絡み合っていたと考えている。

また、飛鳥川原寺から高麗寺へと川原寺式軒丸瓦が伝播したことも含め、丸瓦を含めた系列の成立について詳細に分析している。伽藍整備期にはA系統・B系統という二つの系統の造瓦集団が活動したが、中心伽藍建立後の中門・南門の造営段階になるとA系統は確認できなくなる。その分析から、地方寺院の造営にあたっては、堂塔の建立の度に造瓦工人が臨時的に編成され、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦の生産が分業されることすらあったと考えている。当時の生産体制は総じて流動的で複雑であり、軒丸瓦だけで「系列」を認識することができない。

「第Ⅵ章 7世紀末葉の造瓦体制」では、藤原宮造営段階における造瓦体制について分析している。藤原宮は日本ではじめての瓦葺き宮殿であり、大和国だけでなく、近江・淡路・讃岐などの遠距離でも瓦生産を行なっている。大脇潔らの研究によると17か所の生産地が想定されており、大和国内には9箇所の産地が想定されている。藤原宮式軒丸瓦・軒平瓦という共通する文様が確認されているが、大和国内においても、それ以外の遠隔地にあっても、産地ごとに製作技術の相違が確認される。花谷浩氏らはまず大和以外の地で生産が開始され、その後、大和国内でも生産を行なうようになったと考えている。そのなかで各地の新しい技法を採用し、大量生産を行なったため、産地ごとに多様な製作技術が確認されると想定されてきた。しかし、近年では、藤原宮跡から出土した丸瓦・平瓦の分析が進み、大和でも遠隔地同様に造営開始当初から計画的に生産が開始されたと考えられるようになってきた。また、同一産地の製品であっても、多様性が確認され、山川均氏は、専門的な工人だけでなく「半専門工人」、もしくは土器工人が関与したと想定している。山崎信二氏は大和国内の産地では、大和国内の工人だけでなく、河内・備後・和泉・尾張から工人が徴発されたと考えている。そうした研究成果を整理した上で、藤原宮の造瓦に関しては、従来の分業体制を基盤にして、造瓦技術や造瓦道具の管理における規制が強まっており、それが平城宮造営における「官窯体制」の成立に繋がったと考えている。

「おわりに」では、以上の分析によって明かになって造瓦組織体制の変化についてまとめている。飛鳥時代から造瓦体制は分業化されていた可能性があり、7世紀後半にはその可能性がさらに高まっている。7世紀後半に爆発的な寺院造営が達成されるが、それは造瓦組織を大々的に再編成して達成されたのではなく、小規模で流動性のある造瓦体制によって可能になったと考えている。総じて7世紀の造瓦組織は小規模な造瓦単位が基礎になっていると考えている点に特色がある。

<論文審査の結果の要旨>

古代瓦の研究においては、大量に出土する丸瓦・平瓦を含めた総合的な研究の必要性が指摘されて久しいが、その分析作業が膨大に及ぶことから十分に達成されてこなかった。李銀真氏はそうした膨大な作業に挑み、しかも、7世紀全体を俯瞰しようと意欲的に研究をすすめている点で評価される。分析にあたっては、従来の研究史を批判的に検証しつつ、新たに丸瓦の分析方法を開発・実践し、民俗調査によっても、その研究視点を補っている。丸瓦の製作道具である模骨の識別を新たに開発し栗栖野瓦窯や高麗寺で出土した丸瓦の分析に活用し、模骨の数が一つ、もしくは非常に少なかったことを明かにしている。民俗調査でも丸瓦の模骨は一サイズ一つであることを確認しており、分析結果を補強している。また、奈良・平安時代の文献史料で確認される造瓦組織は、国家組織が運営した大規模なものであり、7世紀代よりもさらに整備されたものであると考えている。そのように考えるならば、8世紀以降の造瓦組織の歴史的な展開を理解しやすい。

そのような分析を通して、造瓦単位や組織が、7世紀を通じて小規模で流動性の高いものであったと想定している点は、従来の研究を新たに塗り替える重要な研究である。これまでは漠然と小規模から大規模に編成されてゆくとイメージされていたが、今回の分析によってその規模の分析が重要であることが理解できる。飛鳥寺の創建のために百濟から派遣された瓦博士が4名である点は、本論によってより理解しやすくなったといえる。少人数の指導者が須恵器工人や土師器工人などの関連技術者の援助を受けて造瓦組織を臨時的に編成し、常に少人数で各地に移動しながら技術を広めていったと想定される。こうした点は奈良時代以降の官窯体制の成立によってさらに大きなものに変容したと想定され、藤原宮の造営は官窯体制のはじまりとして理解されることが多いが、7世紀代的な様相が強い段階にあり、官窯体制の成立は次の平城宮・平安宮の造営を待たなければならないという指摘も重要である。このような視点をさらに8世紀へと発展させれば、官窯体制の成立の意味を、詳細に跡づけることが可能になるだろう。

また、これまで軒瓦の分析を中心に瓦の伝播を「系列」として理解されてきたが、それが軒丸瓦を中心にしたものにすぎず、丸瓦・平瓦を含めれば、より複雑な状況が把握できると指摘した点も重要である。その意味で総合的な瓦の「系列」がどのように認識できるのか、あらたなイメージを提示すべきであるが、批判に終始し、今後に残された大きな課題となっている。

さらに大きな課題も残されている。もっとも大きな課題は、飛鳥時代や藤原宮の丸瓦・平瓦を含めた総合的な分析であろう。今回は飛鳥時代や藤原宮の検討については他の研究の整理と比較に終始している。本論の強みである丸瓦・平瓦の分析を達成できた遺跡数は、膨大な資料のごく一部にすぎない。しかし、これは個人の力量で短時間に達成できるような課題ではない。ここで示した分析方法や視点を広め、各地の研究者と共同して、より詳細な検討を行なう必要がある。現状では仮説に負う部分が多いのではないかという批判もだされ、独特の分析を駆使した丸瓦の模骨の検討についても、さらに方法論の錬磨が求め

られる。

また、研究史の整理やその批判的な検証は注意深くなされているが、民俗事例の検討を含めた使用の実態についてさらに検討を深める必要がある。現在でも屋根の部位によって、瓦のサイズを変更することがあるし、建物の格や規模によっても差を付けることがある。葺き方の民俗事例を検討すれば、ここで新たに開発した丸瓦の分析の評価が異なってくる可能性がある。模骨の少なさは重要な指摘であるが、そうした民俗例を考慮して、徹底して道具と工人、造瓦組織の編成の問題を明かにしなければ、造瓦集団の規模の問題を厳密に検討することができない。方法論的にはさらに厳密な検証が必要であろう。

多くの課題も残されているが、これまでの研究史を批判的に検証した上で独特の視点を提示し、その視点で膨大な資料に積極的に挑んだ意欲的な研究である。そのため、学位授与に値する内容であるということで、審査委員全員の意見が一致した。

<試験または学力確認の結果の要旨>

本論文の公開審査は2014年12月3日（水曜日）16時30分から18時30分まで、末川記念会館第2会議室で行われた。審査委員会は、本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程の在学期間中における学会発表などの様々な研究活動、また公開審査の質疑応答を通して博士学位に相応しい能力を有することを確認した。

以上の点を総合的に判断して、審査委員会は申請者に対して、本学学位規程第18条第1項に基づいて、「博士（文学 立命館大学）」の学位を授与することが適当であると判断する。